

日本の色④ 浅葱(あさぎ):舞台幕の色。吊り下げた幕を下へ落とし、後ろの舞台を一面で出現させる「振り落とし」に使われる。昔はこれで空を表現したという説も。



出演者の声



桐竹勤十郎: 1953年3月1日生まれ。父は二世桐竹勤十郎。67年に現吉田襄助に入門して養太郎と名乗り、翌年4月初舞台を踏む。2003年4月、三世勤十郎を継ぐ。

「父が人形遣いだったこともあり、割と幼い時から劇場には出入りしていました。1体に3人の人形遣いがつきませんが、動きに関しての打ち合わせはしません。互いの動きを感じ取りながら演じるのです。古くから伝わっている良さを残しながらも、今でこそ取り入れられる技術をもっと舞台の演出に入れていきたいですね」



野澤錦糸: 1957年6月11日生まれ。78年に四世野澤錦糸に入門して同年5月初舞台。98年五世錦糸を襲名。

「三味線は太夫の妻役のようなものですが、太夫に合わせて演奏するものではありません。あくまで自分のペースで演奏します。三味線の音で雰囲気を作るためには人生経験が豊かでなくてはなりません。日常生活におけるどんな経験も演奏に生かせるのです」



竹本文字久大夫: 1955年10月23日生まれ。82年に竹本文字大夫(現住大夫)に入門。文字久大夫と名乗る。同年7月に初舞台。

「太夫は床本というものを使います。これは演目ごとにある、台本のようなものです。1ページ5行からなる和綴り本で、基本的に自分で書き写します。太夫の語りの意味が分からなくてもいいんです。まずは気楽に楽しんでください」

文楽の舞台

太夫(浄瑠璃を語る人)、三味線弾き、人形遣いの織りなす世界“文楽”。文楽の行われる舞台について知っておこう。

- 1 床: 太夫と三味線弾きが演じる場所。床の中央の盆が回転し、出番の太夫と三味線弾きが登場する。
- 2 手摺(てすり)、舟底: 一から三の手摺まであり、一の手摺は観客との境界線。二と三の手摺の間は掘り下げてあり舟底と言う。この舟底を人形遣いが動く。
- 3 御簾内(みすうち): 舞台に向かって右を上手の御簾内と言い、若手の三味線弾き数人がここで演奏する。逆は下手の御簾内。こちらでは三味線以外の鳴り物が演奏される。
- 4 小幕(こまく): 人形と人形遣いの出入りする場所。

文楽とは

16世紀末、室町時代に発生した浄瑠璃が人形劇に使われたのが始まり(操り浄瑠璃)。京を中心とする上方で発展し、江戸に伝えられた。18世紀にはほぼ現在の形になる。19世紀初めに人形浄瑠璃の小屋“文楽座”が建てられ、華やかな一時代を築いたことから、やがて人形浄瑠璃は“文楽”と呼ばれるようになった。

時代物と世話物: 文楽には大きく分けて時代物と世話物の2種類がある。時代物とは公家や武家の世界を描いた作品。時代設定は江戸時代以前であり、歴史的な事件や人物を扱っているものが多い。一方、世話物とは江戸時代の庶民の生活を題材にした作品。当時実際に起こった事件や町人たちの恋愛・人情をリアルに描いている。

人形の首(かしら)。それぞれの首には“性根”と呼ばれる性格づけがされている



写真/日本芸術文化振興会



Toshio Abe

阿部俊夫(あべとしお)氏 1956年生まれ。83年より国立劇場勤務。文楽ブームの仕掛け人。「現代人が忘れていないでそのまま伝えていきたい。理解しようと無理をするより、自由に感じて純粹に楽しんでほしい」

まずは気楽に楽しもう

文楽は“三業一体”

文楽は2003年に世界無形遺産に登録された日本が誇る舞台芸術だ。太夫、三味線、人形という3要素からなり、単に人形の動きに面白さを感じる芸能ではない。太夫が語る浄瑠璃、場の雰囲気や音で表現する三味線、人形に命を吹き込む人形遣い、様々な人が互いに主張し、共鳴し、独特の雰囲気を作っているのだ。今回、各分野の方に話を聞くという幸運に恵まれた。詳細は上記を参照してほしい。

文楽を観てまず驚くのが太夫の熱演である。物語を語るだけでなく、展開に合わせた表現力。声色や強弱を変え、汗を拭きながらの大活躍である。初心者はどうしても人形に目がいくが、ストーリーをリードするのは太夫である。そして太夫の横で静かに弾いているように見えるがしつかり情景や登場人物の心理描写をする三味線の音色、心にずんと入ってくる。そして華やかな舞台で演じられる人形は主遣いが頭と右手を、左遣いが左手を、足遣いが足を担当、1体の人形を3人で操っているのだ。

連載第十三回 400年以上続く古典芸能

競演の世界“文楽”

真の国際化とは自分の国を知ること。日本が誇る舞台芸術、文楽。太夫、三味線弾き、人形遣いの作り出す独自の世界を楽しもう。

写真上部の棚には「劇場稲荷」が奉られている。出演者たちはここで舞台の成功を無事祈り劇場に入っていく。人形は「三番叟(さんばそう)」と言う上演前に舞台を清める役割を担う。

渡辺幸裕(案内人) ◆ 文+寺尾豊 ◆ 写真
text by Yukihiko Watanabe ◆ photographs by Yutaka Terano

さらに深める参考情報…

【書籍】

『文楽にアクセス』(松平盟子著、淡交社)
『文楽ハンドブック』(藤田 洋著、三省堂)
『人形は口ほどにものを言い』
(赤川次郎著、小学館)

【ウェブサイト】

日本芸術文化振興会
http://www.ntj.jac.go.jp/
文楽協会
http://www.bunraku.or.jp/japanese.html
会員制有料サイト ジャパン・ナレッジ
http://www.japanknowledge.com/

【告知】

日本かぶれの会
国立劇場で「文楽」を楽しむ

今回紹介した初心者向けの演目「冥途の飛脚」を観劇します。観劇後にはプロデューサーの阿部俊夫氏を迎えての懇親会があります。お気軽にご参加ください。

日時：5月8日(日)11:00~17:00
会場：国立劇場小劇場
東京都千代田区隼町4-1
Tel 03-3265-7411

演目：「冥途の飛脚」ほか
募集人数：25人
参加実費：8000円(観劇代、講演代)
締め切り：4月1日(金)
応募方法：http://nba.nikkeibp.co.jp/yamato13/で必要事項をご入力ください。
発表：参加者に直接ご連絡します。
問い合わせ先：info-nba@nikkeibp.co.jp

ご応募いただいた方に、本誌の取材協力者として取材や写真撮影をお願いすることがございます。ただし、これら以外の目的で応募者の個人情報を使用することはございません。

— 文楽を観る時の着物 —

藍染め・大島紬のアンサンブル。大島紬独特のシャリ感が春のカジュアルなお出かけにお薦め。長時間の観劇などでも楽に過ごせる。(渡辺幸裕)



ほかしの小紋。春らしい淡い着物にしっかりした印象の帯で全体を引き締めたコーディネート。大人っぽさを演出。(砂塚美穂さん 読者、人材紹介会社勤務) 着物撮影協力/銀座もとじ

案内人・文

渡辺幸裕(わたなべ ゆきひろ)
ビジネス・コーディネーター。1950年生まれ。前職のサントリー宣伝部で、海外イベントを担当した時、自国文化についての知識のなさを痛感。2001年独立を機にビジネスパーソン向けに日本文化超初心者向けの会“和・倶楽部”を提唱、運営中。会のコンセプトは「日本人に生まれたことを喜びたい」。

「冥途の飛脚」



遊女 梅川

初心者には、現代にも通じる物語「冥途の飛脚」の鑑賞を薦める。

あらすじ

飛脚問屋の養子忠兵衛は遊女梅川に入れ込んで、友人の八右衛門に借りたお金を使い込んでしまう。心配した八右衛門はこれ以上忠兵衛が深みにはまらないよう、遊女たちに話をしに行くが、武家屋敷に公金を届けに行く途中の忠兵衛がそれを聞き、悪口を言われていると勘違いをしてしまう。怒った忠兵衛は懐にあった他人のお金の封を切り、そのお金で八右衛門に借金を返し、梅川を身請けする。しかし封印切りという大罪を犯した忠兵衛は追われる身となる。梅川と郷里に逃げるが、やがて捕らえられてしまう。

見どころ

「淡路町の段」では当時の飛脚屋の生活が珍しい。「封印切の段」では藤の雰囲気描写がリアルで、封印切りがいかに大罪であるかもよく分かる。「道行相合ご」で2人が1つの駕籠に乗る場面も見もの。

文楽を見るには

初心者にお薦めの作品

- 1 曾根崎心中(世話物)：お金のトラブルに巻き込まれた徳兵衛と、恋人お初の中物語。
- 2 五条橋(時代物)：かの有名な牛若丸と弁慶の出会いの物語。「鬼一法眼三略巻」の一部。
- 3 女殺油地獄(世話物)：油商の放蕩息子と兵衛が、お金を貸してくれないことを理由に、お吉を殺してしまう物語。
- 4 伊達娘恋結鹿子(世話物)：娘お七が恋人の命を救うため、禁を犯して火の見やぐらの半鐘を鳴らす、恋物語。

事前に学び劇場で楽しむ

三者がそれぞれの分野で作り上げる舞台だからこそ、文楽は三業一体の芸術と言われている。文楽を観た外国の芸能関係者は指揮者がいないことに一番驚くという。

文楽を観ると江戸時代の人の考え、作り事である芝居を楽しんでいた様子がよく分かる。時代物の中にあるエピソードは現代のビジネスに通じるものがあるし、世話物に見る事件や人情の機微は我々の周りにあるものと基本は同じなのだ。文楽が関西発の芸能であることを感じるとさらに興味深い。禁止事をかいくぐって作られた芝居であるから、生活実態そのまま

ではないが、開国につながる時代の日本を知るには格好の素材だ。太夫、三味線弾き、人形遣いそれぞれが口を揃えるのはまずは楽しんでほしい、ということ。少しばかりの事前学習をして劇場に臨むと、楽しめる要素がたくさんある。劇場では学ぶという姿勢は忘れること。特に床本という台本があるのだが読むとはつきり言っていない。これではあまりにも眠くなる。これではあまりにも眠くない。日本のシェイクスピアと言われる近松門左衛門の世界が忠実に再現される日本がそこにあるし、現代に通じる「江戸時代の日本」を感じることが出来る。日本の誇る世界無形遺産、日本人である我々が大いに楽しみたい。